sima Univ., Ser. B, Div. I, Vol 7, Art. 11.
5. 三好保德. 1941. *Ischyropsalis abei* Sato et Suzuki の一畸形 Acta Arachnologica Vol. . No. 1.

內南洋產多足類の概觀*

附. 日本に於けるフサヤスデの發見

高桑良興・高島春雄

東京文理科大學動物學敎室

內南洋の動物相は近年急速に明かにされつゝあるが それでも動物群によつては未だ大きな纏まりのついて居ないものがある。脊椎動物では爬虫類と兩棲類がそれである。標題の多足類も其の1例であらう（蜘形類もサソリ・サソリモドキの仲間を除けば又然り）。多足類は蜈蚣類（ムカデ）馬陸類（ヤスデ）少脚類（ニハムシ）結節類（コムカデ）を總稱した群名で，今日までの處日本産[2)]は第1のもの10科36屬153種及亞種，第2のもの24科56屬157種及亞種第3のもの2科3屬3種，第4のもの2科3屬3種以上あるがミクロネシア產は其等の中の何パーセントを占めるであらうか。

予等は從來も同學の方々の御厚意により內南洋產多足類標品を所持して居たが，殊に昨年は九州帝大江崎教授が昭和11年から同15年にかけてのミクロネシア探檢の際採獲された多足類關係の標品（頗る豐富な蒐集である）を擧げて予等の自由檢討に委ねられたので 茲にミクロネシア產の普通の多足類は悉く觀ることが出來たとの信念を得，尙文獻をも涉獵して一つの纏まりをつけるこ

* 昭和17年10月24日仙臺市に於ける日本動物學會第17回大會席上高島により口演されたのを敷衍したもの。

1) 今回の第17回大會に於て大島正滿博士は「西カロリン群島產爬虫類の分布を論じウエーベル線に及ぶ」と題し講演せられ，所逹爬虫類を一先づ纏めて下さつたのは愉快である。尙兩棲類は無尾類が2種きりであるが其等の天籍に關する報告を未だ見ない。

2) 今回の內南洋產をも含む。

とにした。委細は高桑が「我が南洋群島の多足類」と題し科學南洋[3]に發表したから屬種一覽を此處には掲げない。當時鹿兒島高等農林學校助手堀井榮吉氏が大正3年の末から大正4年2月にかけ4種のヤスデをトラツク，ポナペで採集し大正5年に報告されたのが本邦人では內南洋多足類研究の先驅となつた，予等は所檢標品よりしてムカデ18種及亞種（內新種2）ヤスデ18種（內新種6）と考定した。コムカデ及びニハムシはどうしたものか未だ1度も採集例が無い（コムカデは江崎教授が相當注意して下さつたのであるが未だ見つからない。ミクロネシアには蔗園もあること故さういふ場所で採集の便宜を持たれる方々の御注意を切望する)。之等の內オホムカデ，タイワンオホムカデ，パラオフトヤスデ等[5]は所謂熱帶人畜有害動物として注意すべく，デムカデのヒラタヒゲデムカデ，馬陸のカグヤヤスデは共に發光する多足類である。ポナペギボウシヤスデ及びパラオギボウシヤスデは頭部が吻狀を成して前方に眞直に突出する異形の馬陸で其の纖細な體軀は馬陸の仲間とも見えぬ位である。前者は江崎氏によりポナペで，後者は關口晃一氏によりパラオで夫々採集されたが此の屬 *Siphonophora* も，それの隷する科 Siphonophoridae も本邦未記錄であつた。

內南洋の動物分布に關しては對象とする動物群により各專門家の間に多少の意見の開きがあるやうである。近頃江崎博士は昆蟲を對象としたミクロネシアの動物地理學的區分を論じ[6]マリアナ群島區（サイパン其の他）西カロリン群島區（パラオ群島，ヤツプ其の他）東カロリン群島區（トラツク，ポナペ其の他）珊瑚環礁區（ヤルート其の他）の4區に劃すべしとされた。ミクロネシア所產多足類は其の種類少く又外南洋產の多足類に關する予等の知識極めて乏しき憾みがあるが，さうした不利を無視しても消極的に江崎教授の區分論を支持するといふ結論に到達した。

---

3) 科學南洋 vol. v, no. 1, pp. 14-44, 21 figs. (1942)

4) 堀井榮吉　新領土南洋諸島動物調査報告書　南洋新占領地視察報告〔文部省專門學務局〕pp. 234-266〔多足類 pp. 251-252〕(1916)
所揭4種共 *Julus* sp. とあり其の內初出のものは今日のエサキフトヤスデであるが他の3種は記述簡單にして今日のどの種に當るか判定し得ない。

5) 江崎悌三　委任統治南洋群島に於ける人體の害蟲(第1報)　吉田博士祝賀記念誌論文篇 pp 230-252 (1939)

6) 江崎悌三　我が南洋の昆蟲　寶塚昆蟲館報 no. 1 (改訂再版) pp. 1-10 (1941)

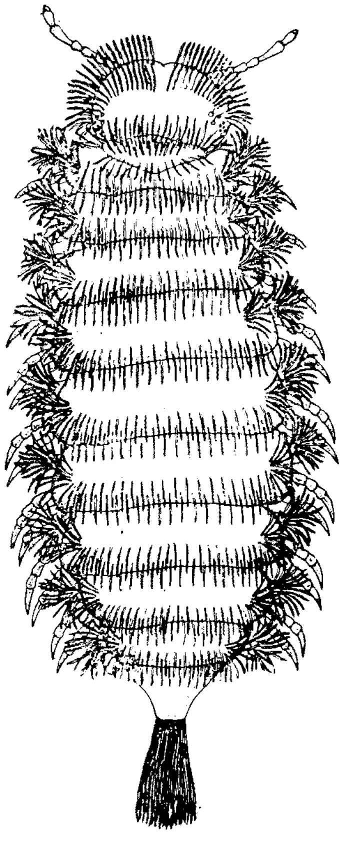
尙此の機會に本邦に於ける觸顎類の發見を附言し度い。馬陸類は詳しい分類法では節足動物門中の1綱であるが其の馬陸綱は二つの亞綱に分割される。一つは唇顎亞綱 Chilognatha で殆ど總べてのヤスデは此の中に包有される。今一つは觸顎亞綱 Pselaphognatha で現世に1科11屬50種位しかない。此の仲間は皮膚は寧ろ柔かく胴節も歩脚も數少く成雄にも生殖肢は無くおまけに胴節の左右に特異の毛總を生じて居る。教科書などに揭出されて居る圖を瞥見したのでは環形動物の多毛類かと早合點する程である。岸田久吉氏（1935）は此のフサヤスデ類を 4 科に分けられたけれども予等は從來通り 1 科〔フサヤスデ科 Polyxenidae Gray et Jones (1842)〕とし其の中に 11 屬を認める。

Ankistroxenus Attems (1903)
Hypogexenus Silvestri (1903)
Koubanus Attems (1928)
Lophoproctus Pocock (1895)
Macroxenus Brölemann
Monographis Attems (1907)
Polyxenus Latreille (1802-1804)
Saroxenus Cook (1896)
Schindalmonotus Attems (1928)
Synxenus Silvestri (1900)
Trichoproctus Silvestri (1899)

フサヤスデ類は馬陸類中の最小者で *Polyxenus lagurus* (Linnaeus, 1758) は 2.5 粍位である。人生との交渉は皆無ながら學術的には大いに吾人の注意を惹く動物群である。汎く世界に分布するものながら本邦では昭和 7 年江崎悌三氏[7]が「本邦からは未だ發見されないが産しないことはないと思ふ」と豫言されたのに始まり昭和 10 年に到つて漸く岸田久吉氏[8]が「本邦には胴節 11 個のフサヤスデが最近に見付かつた。體長 3 mm 許りの小さいものである」と短報された。谷津直秀博士が動物分類表全訂改版（昭和 13 年）に於て「*Polyxenus* フサヤスデ、邦産最近發見」（p. 237）となさつた根據は上記岸田氏のものに在つたことゝ想ふが、嘗て岸田氏から承つた所では右は北九州産で未成熟の標品であ

7) 江崎悌三 多足類蜘蛛類〔岩波講座生物學〕p. 16 (1932)

8) 岸田久吉 ヤスデの採集と分類 紀州動植物 vol. ii, no. 1, pp. 1-38, 22 figs. 〔p. 4〕(1935)



トウマフサヤスデ背面（約31倍）
〔原圖〕

るから其の後詳報を差控へて居るとのことで，*Polyxenus* と決つたわけではない。即ちフサヤスデ類の1種が北九州で採集されたとのみで其の天籍は少しも明かにされて居なかつた現状である。沖繩縣立第二高等女學校教諭にして本會會員たる當眞嗣元氏は曾て沖繩本島首里でフサヤスデ類を5頭採集しフサヤスデ類なりとの見當をつけ其の標品を江崎博士に贈られた。此の時 *Schizomus* の標品も一緒に贈られた。其等は何れも江崎博士の御厚志で予等の手許に渡り *Schizomus* は高島が本誌 vol. vi, no. 3 に報告した。[10] 不幸にして5頭のフサヤスデは不良な標品で檢査する度に毛總が剝離して來る樣な不愉快を伴つたが，どうにか同定は出來た。茲に予等は本邦に於ける Pselaphognatha の棲息を確認し其の屬種を決定し且つ**新種などにせずに濟んだ**ことを欣幸とするものである。

屬はモノグラフィス屬 *Monographis* で次出の種を genotype として Attems が明治40年に創設したものである。[11] ジャワのボイテンゾルフで節足動物學者クレペリンが採集した標品に基きアテムスが設

9) 此の興味ある標品を予等に讓られた同博士の寛大に敬意を捧げるものである。

10) 高島春雄　日本產全蠍目及脚鬚目知見補遺　Acta Arachnologica vol. vi, no. 3 pp. 87-98, 7 fig. 〔ヤイトムシ沖繩に產す　pp. 93-97〕(1941)

11) Attems, C. Javanische Myriopoden, gesammelt von Direktor Dr. K. Kraepelin im Jahre 1903—Mitteil. Naturhist. Mus. xxiv, pp. 77-142, 42 text-figs., 3 pls., 71 figs. (1907)

けた種が *M. kraepelini* 〔Mitteil. Naturhist. Mus. xxiv, p. 99, text-figs. 10-17, Pl. I, figs. 21-22 (1907)〕であるが 今回の沖繩産は此の種に同定すべきで當眞氏の殊勳を顯彰すべく和名に氏の姓を頂戴してトウマフサヤスデと定め，第2の產地として沖繩本島首里を記錄して置くものである（採集年月日は不分明になつた）。其の後 1909 年にアテムスは此の屬の第2の種 *M. schultzei* を南アフリカより報じ[12]近く 1924 年フェルヘフは第3の種 *M. mjöbergi* を西オーストラリアから記載した[13]。トウマフサヤスデはアテムスの原記には部分圖のみであるから微小且つ不良な標品ながら勇を鼓して世界最初の全形圖を作つた。相當模式圖的になつたのは止むを得ないことである。(10月30日)

チャグロサソリとカネグロサソリ*

高　島　春　雄

東京文理科大學動物學教室

§ チャグロサソリ再說

昭和 15 年 11 月 30 日日本動物學會例會で「日本產全蠍目及脚鬚目」と題して講演した時竹脇潔博士から東大理學部動物學教室に永らく保存の標本に臺灣產(？)とラベルを附した大きな蠍があることを承つた，今年 9 月に至り同博士の御芳志で其の標本を借用調査するを得た。乾燥標本でラベルには"Formosa？"とある。乍併此のサソリの產地を臺灣とすることは既往の知見が許さない。南方共榮圈のどこかの產であるが此のラベル以外何の手懸りも無い。私は此の標本をチャグロサソリ *Heterometrus longimanus longimanus* (Herbst, 1800) の♂と看做す。背甲長は正中で測つて 14 粍，前腹長 26.5，後腹は反轉して，丁度刺螫する時のやうな姿勢で固まつて居るので長さは 42～45 粍かと想はれる。右の觸鬚を測ると轉節長 5.5 粍，腿節長 18，脛節長 19，掌長 17，指長 18

12) Attems, C. Denkschr. medic. u. natuw. Ges. xiv, p. 33, Pl. III, figs. 67-70 (1909)

13) Verhoeff, K. W. Ark. Zool. xvi, no. 5, p. 38 (1924)

* 東亞產全蠍類脚鬚類の調査（其の六）